

ザンビアにおける HIV/エイズ教育の課題 —西部州モングの青少年に対する意識調査を通して—

1155081 三枝尚人

指導教員 藤掛洋子

【背景・目的】筆者は2014年8月～2015年1月、ザンビア共和国西部州モングにおいて、HIV/エイズ対策のNGOプロジェクトにボランティアとして参加した。その際に地域社会の中で見受けられた、HIV/エイズに対する危機感と知識・行動のずれの要因を明らかにすることで、HIV/エイズ対策の効率化に貢献しようとするのが、本研究の意義である。特に、人口増加に伴って、青少年の健康に関する意識・行動変容の重要性が高まってきているという、途上国に共通の背景を踏まえ、青少年がHIV/エイズをどう意識し、行動しているか、また、それに影響を与える教育ファクターに焦点を絞った。

青少年に対するHIV/エイズ教育の国際スタンダードとしては、禁欲主義教育は感染率の低下に逆効果であるとされている。また、包括的性教育によってライフスキルを育むことが重要であり、性生活に実践的なスキルを青少年に身につけさせることが提唱されている。

【方法】高校生6人、NGOの同僚1名に対する個別インタビュー調査（半構造型）、地域の学校のアクション・エイズ・クラブ（HIV/エイズについて学ぶ、任意参加のクラブ活動）における参与観察とクイズ結果の分析、文献・統計資料調査。

【結果・考察】インフォーマントがHIV/エイズ教育を受ける場所や時期は多様であり、学びのプロセスは一律でないことがわかった。また、学校教員による教育に対する評価は非常に低く、機能していない現状が観察された。そのため、家庭内教育に恵まれない青少年は、自発的な行動を取らない限り、HIV/エイズ教育を十分に受ける機会がないことがわかった。また、HIV/エイズを十分に知る前に、セックスを経験する者もあり、教育の時期が青少年の性経験に間に合っていないこともわかった。さらには、HIV感染について、セックス以外の側面（刃物等を介した感染）が誇張される

など、性を語ることを忌避する風潮も見受けられた。

一方、学校教育の指針となるカリキュラムにおいては包括的性教育の重要性が示され、生徒が実践的なスキルを身につけることが目的とされていた。

【結論】12歳頃の青少年はHIV/エイズに関する知識が不足しているが、思春期に集中して知識を身につけ、18歳頃には多くの知識を持つようになる。しかしながら、地域社会における禁欲主義的な価値観は、包括的な知識・スキルを身につけられる環境作りを阻害するため、18歳になっても誤った認識を持っている青少年は多い。そのため、多くの青少年にアクセスできる学校教育の現場が包括的なHIV/エイズ教育を行うことが求められるが、学校教育はその役割を果たしていない。NGO等の外部機関が学校を訪問して行う教育は評価が高いが、そのような活動は任意参加であることがほとんどであり、農村地域をカバーするのも難しく、すべての生徒にアクセスすることができないため、学校の授業の中で教員が役割を果たすことがより一層求められる。

また、青少年の性経験の早さを踏まえ、ベーシックスクール（7～15歳）の段階で、スキルを含めたHIV/エイズ教育を行うことが重要である。ベーシックスクールで教育課程を終える青少年がほとんどであるという事実からも、これは必須の政策である。

学校教員によるHIV/エイズ教育の充実には、教員自身が自らを「政府（カリキュラム）—学校—教員—生徒」というカスケードの中に位置づけ、役割意識を持つことが必要になる。そのためには、教員の能力強化の環境整備が重要になり、保健・教育ファクターが共通して、教員による包括的なHIV/エイズ教育の重要性を認識することが求められる。